

題目：母ウマにおける離乳作業後のストレス反応・回復傾向についての探索的検討

氏名：吉岡航太郎

指導教員：瀧本彩加

群れで暮らす動物の多くは、どの個体も「親しい個体」を持っている。その中でも最も密接な関係は、母子である。子の初期発達の一定期間は、子にとって母が最も親しい個体となり、母子関係が子の発育にとって非常に重要になる。ゆえに、母子分離は大きなストレス要因になり得るが、家畜動物においては家畜動物の個体管理の簡易化、発育の均一化などを念頭に置いた強制的な離乳作業の手法が確立され、毎年繰り返行われている。しかし、離乳作業による強制的な母子分離に母子のストレスに関する実証研究はいまだ少ない。とりわけ、毎年繰り返行離乳作業を経験する母親個体におけるストレスに関する詳細な行動観察研究は、ストレス耐性の低い母ウマを予測し、そのストレス緩和のための措置を早期に効率的に実施することにもつながる可能性があり、母親の健全な子育てを促し、次世代の子の健やかな発育に貢献しうるにもかかわらず、まだほとんどない。そこで、本研究では、集団放牧されている北海道和種馬を対象に、離乳作業（強制的な母子分離）による子ウマとの別れが母ウマにストレスを与えるのかどうか、ストレスを与えるのであれば、それはどのようなストレス反応として表出されるのか、そのストレスはどれくらい長く続くのか、を検討した。また、子育て経験量や子ウマの性別・離乳時期が離乳作業後のストレス反応の強度やストレスからの回復の速さにおける個体差に及ぼす影響について検討した。その結果、離乳作業前に比べて離乳当日にのみ、母ウマにおいて、いなきの回数が有意に多くなり、移動・排便の回数が有意に多くなる傾向が示された。ただし、それらのストレス行動はすべて、離乳の1日後には、離乳前の回数と差がない程度まで減少した。また、1日あたりの臥位休息や採食といった個体維持行動に費やす時間の割合は、離乳前後で変化しなかった。したがって、離乳作業による子ウマとの強制的な別れによって母ウマにストレスが生じ、そのストレスはいなきや移動・排便といった行動の増加に反映されることに加えて、そのストレスは一時的に生じるもので、個体維持行動を減少させるほど強く生じるものではないことが示唆された。さらに、子育て経験量・子の性別・離乳時期が、母ウマのストレス強度（離乳当日のストレス行動の回数）やストレスからの回復の速さ（ストレス行動の回数が離乳前の回数以下に戻るまでに要する日数）に影響するという結果は得られなかった。離乳作業による母ウマのストレス反応は、子育て経験量などの要因に関わらず、見られるのかもしれない。